
幻想郷の白き魔女【リメイク】

ひろっさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想郷の白き魔女【リメイク】

【Nコード】

N1341BA

【作者名】

ひろっさん

【あらすじ】

これは『魔法少女リリカルなのは』シリーズの二次創作小説です。転生、女オリス、チート、原作改変ものです。主人公最強も入るかもしれませんが。

女主人公、ピュアが迷い込んだ場所は『時の庭園』。

基本的に原作キャラに心配されたり心配したりしながら、様々な問題を解決していこうという物語です。

ただし、残酷な描写が不意に出てくる場合がありますので、閲覧の際には充分ご注意ください。

それでいいという人だけとか、細かいことは言いませんが、自己責任でお願いします。

これは拙作『魔法少女リリカルなのは 幻想郷の白き魔女』のリメイクですので、ほぼ同じ展開があることをご了承ください。

第0話 プロローグ

幻想郷『アルハザード』。

現代に繋がる魔法文明の祖にして、虚数空間の奥深くに封印された、魔法技術の理想郷。

そこには幾つもの世界を滅ぼせる、恐るべきエネルギーを秘めた魔法具や、永遠の命を実現する夢のような技術が眠っているといわれる。

そこは、運命に惹かれた者だけが到達できた。

そして到達者の多くは、ある1つの技術を求める。

それは死者蘇生。

『アルハザード』以外にも様々に研究が行なわれ、しかし、実現した例は皆無。

『アルハザード』には確かにそれが存在する。

外の世界のような紛い物ではなく、本物の蘇生法が。

しかしならば、なぜこの摩天楼には絶望にうずくまり、座してただ死を待つ人間が数多いのだろうか。

そのことに少しでも気付くことができたなら、後の悲劇は回避できたかもしれない。

悲劇で終わることができたかもしれない。

腐敗しないように、保存液に浸された、黒髪の幼い少女の遺体。ケースを抱えるのは、同じく黒髪の、半面に青い痣のある女性。

母親だった。

彼女は摩天楼の一室に籠り、脇目も振らずに研究し続けた。不老不死、蘇生、魂の帰還。

そして目的の、自分に理解できる蘇生技術を発見する。

娘が動き出したとき、母親は我が子を抱き締めて泣いた。

幼い娘の瞳が白く濁り、視力を失ったことなど、些事に過ぎなかった。

すぐに、知っている魔法で擬似視力を与える。

慣れるまでに多少は時間がかかるが、自分達にはたつぷり時間がある。

しかし、幸せな時間は長くは続かなかった。

数日後、娘が体調を崩す。

原因は、蘇生によってある特殊能力レフスキルに目覚めたことだった。

『エモーショナル・レセプション
情動感応』

それは他人の、感情の動きを読み取る能力。

当時彼女らが住んでいた摩天楼には、永遠の命や蘇生に失敗して生きる気力を失った多くの渡航者が存在していた。

そんな絶望に染まった心の声が、直接娘の脳に送り込まれていたのである。

数日は母の狂喜が守っていたが、いずれは感情も落ち着いてくるため、守護にも限界がある。

日に日に容態が悪化していく娘に焦りを覚えながら、母親は『エモーショナル・レセプション
情動』

感応』を封じる方法を探す。
知っている魔法ではほとんど効果が無かったため、かなり強力な封印でなければならぬ。

運良く、1週間ほどで強力な封印力を持つ魔法具を発見した。

最早一刻の猶予もない。

母親は安全確認もそこそこに、その魔法具を娘の身体に埋め込み、起動した。

娘の容態は落ち着き、次第に回復していく。

それから半年ほどは幸せだった。

母親は愛情を注いで色々なことを教え、娘は教わったことを真綿が水を吸うように次々と吸収する。

娘は天才的だった。

母親はその才能を喜び、自分のすべてを伝えようとし、また娘はそれによく応えた。

原則として、『アルハザード』には脱出する手段というものがないいや、あるにはあるのだが、生身の人間が使えるようにはできていないのだ。

そして、外から持ち込まれたような手段では、脱出は不可能だった。

ただ、衣食住について高いレベルで管理されたものが供給されており、早急に脱出する必要性もない。

少なくともこの母娘にとっては、この半年間は安寧な空間だったのだ。

この母娘は『アルハザード』を訪れた中では、数少ない成功例と言

えたかも知れない。

半年後のある日までは。

「私は 　　　に帰らねばならんのだ。 なんとかしても 』
』を
倒さねば、ここへ来た意味が無い」

1人の男が母娘の元を訪れ、言った。

多く『アルハザード』を訪れた者の中で、死者蘇生を目的とせず、
また永遠の命も求めず、ただ刹那の力を求めた男。

彼は自分の娘を蘇らせることに成功した、ほぼ唯一話ができそうな
人間に、自分の目的を手伝ってもらおうとした。

てつきり、『アルハザード』の住人ならば、その技術に詳しいもの
だと思ひ込んでいたらしい。

しかし、期待は裏切られる。

元々、母娘は『アルハザード』へ来て、そう年数が経っていない。
膨大な量の技術のすべてに目を通す時間も理由も、2人にはなかつ
たのである。

男の祖国は戦争を行っており、自分も力になれるような、そんな
技術を求めて『アルハザード』渡航を決行した。

王の理想を実現し、多くの次元世界を傘下に収めた大帝国を築くた
めに。

ところが、『アルハザード』から元の世界へ帰還する方法がない。
これでは本末転倒だ。

男は母親を脅し、帰還する方法を探させる。
自分は目ぼしい魔法具を集めるために時間を費やした。

だが、結論は変わらず。

虚数空間と呼ばれる領域を逆行するような、そんな方法は存在しなかった。

逆に、『アルハザード』の封印がどのように行なわれたのかが判明した。

次元断層、つまり虚数空間に放り込む。

それ自体が封印だったのである。

途中に虚数空間つまり魔力が力を失う領域があり、『底』から上がる方法がない。

『アルハザード』に眠る膨大な数の超技術ですら、虚数空間を越えることができない。

だからこそ、この方法で『封印』が行なわれたのだ。

ここへ辿り着くまでは封印の存在を明かされず、そして探そうにも、性質上内部にその技術は遺されていない。
話を聞いた男は、力なくうなだれる。

男は娘を連れ去った。

帰る方法が見つからない以上、『アルハザード』から目標を殺す方法を採るしかない。

そしてその方法を、彼は見つけ出していたのだ。

その方法とは、娘に埋め込まれた魔法具の封印を解き、他者に『接

続』を行うことである。

その魔法具はそもそも、特定の魔法効果を遠隔発生させるもので、次元を超えて対象に『接続』することが出来る。

応用すれば、選択した対象に攻撃魔法を打ち込むこともできた。

ただし、対象が正しく選択されているかどうかはわからない。

母親は娘の肉体に埋め込むことで、娘1人だけは正しく選択できるようにした。

それをすべて自分に向けてすることで、娘は他者との接続を希薄にし、『エモーショナル・レセプション情動感応』を封じていたのだ。

だから、悲劇はここから始まった。

強力な『エモーショナル・レセプション情動感応』は、その魔法具の正しい対象選択を可能にしてしまったのである。

同時にそれは、『エモーショナル・レセプション情動感応』によって選択された対象の、死に際の絶望や怨念をその身に受けるということでもあった。

8

母親は血眼になって娘を探した。

発見したとき、娘は大量の髪の毛が抜け落ち、肌から色素が抜け落ち、うずくまって痙攣していた。

床には吐瀉としゃされた汚物が吐き散らかされている。

隣には、目的を達成して高笑いを上げる男。

母親は男が行ったことを理解し、油断している男を護身用に持っていたナイフで背中から刺し殺した。

それから、辛く長い日々が続く。

眠ると叫び声を上げ、母に縋り付いてガタガタと震える娘。

食事もまともに摂れず、栄養は点滴で補給するしかなかった。

身体はどんどん痩せ細っていく。

なにより辛いのは、精神的な病であるため、治すには時間による自然治癒に任せるしかない点である。

向精神薬も精神安定剤も、根本的な解決にはならないのだ。

そして。

「お母さん、お願い、わたしを殺して」

娘は懇願した。

娘の死体が消え去るのを見て、最後の過ちを悟った母親は自分の首筋にナイフを当てた。

男を殺し、娘に死を贈ったそのナイフを。

こうして、母娘の物語は幕を閉じた。

悲劇は幕を閉じた。

幸せな生活を送っていた頃、ある1人の『アルハザード』渡航者の最期を2人は看取った。

幸せな生活を送る2人に気付き、ある警告を告げたのだ。

「ここは『絶望の都』だ。気をつける、今は平気でも、何か落とし穴があるぞ。」

ここには、何か予期せぬものを代償として捧げなければならない技術しかないのだからな」

と。

その渡航者は言い終わると、そのまま意識を失い、数時間後には息を引き取った。

悲劇を起こした男が現れる、たった数日前のことだった。

第0話 プロローグ（後書き）

プロローグです。

以前、この辺の話を出してほしいと読者様からご要望があったので付け加えました。

これ以上グロい話にしろってのは勘弁して下さい。

残酷表現程度の話ではなく、精神崩壊者の心の中身をリアルに描くことになりますので。

それをやると、作者自身が精神崩壊を起こす危険性に触れることになります。

あれほしいこれほしいってブーメランするのはいいんですが、その小説の影響を一番強く受けるのが作者だってことを忘れないでほしいです。

第1話 転生、希白少女

『時の庭園』

フェイトは数年間ここで育った。

次元航行能力のある、巨大な邸宅と思えばいい。中は広い。

運動会を開くことができるほどだ。

フェイトは母の使い魔リニスに、ここで魔法戦闘についての技能を教わった。

転送装置があるのは、そんな中庭の先。

母の所有物らしいが、フェイトはどういった理由で母が『時の庭園』を持っているのか、知らなかった。

まあ、知る必要も無いだろうし、今は知ろうとも思わない。

中庭を横切る時、フェイトの視界の端に、白い異物が映った。白い床よりも白い、何か。

「？」

フェイトはそれに視線を向ける。

それは人の形をしていた。

中庭を歩いて近付くと、すぐにその正体が判明する。

「裸の女の子……？」

「フェイト、どうかしたのかい？」

「あ、アルフ、この子……」

オレンジ色の長い髪に犬耳、尻尾の女性アルフに声をかけられ、フェイトは倒れている少女を示す。

真っ白、と形容するのが最も正しいだろう。

短い髪の毛も細い手足も、白一色だ。

フェイトはまだ、色素欠乏症^{アルビノ}という病気を知らない。

それでも、何か病気を持っているように感じられた。

そのくらい弱々しく、儂げであったのだ。

「なんとかしてやりたいところだけど、今はちょっとまずいねえ」

アルフは難しい顔をする。

そう、今はまずい。

母から、近くにある次元世界『地球』に降りて、『ジュエルシールド』という願い事の叶う石を探すように命じられているのだ。

本当ならすぐにでも向かいたいところなのだが。

おそらく、この少女は次元漂流者。

何かの拍子に次元の穴が開き、その穴に落ちて生きたままどこの世界に漂着した人間。

10年に1人か2人ほど発見されるそうだが、元の次元世界に戻ることができた例は皆無だとか。

本来は次元世界をまたにかける警察組織、時空管理局に引き渡されることになっている。

しかし、これからフェイトが行なおうとしているのは犯罪ストレスの仕事であり、一歩間違えれば捕まってしまう。そんなときに、管理局と関わりたくはなかった。

「んう」

真っ白な臉を開き、裸のまま倒れていた真っ白な少女はゆっくりと起き上がった。

「あ……！」

フェイトは少女の瞳を見て息を呑む。

隣のアルフからも、動揺したような気配が伝わってきた。

本来あるべき色が、その瞳にすらなかったのである。

不自然な、自然界にはありえない配色。

白。

真っ白。

白く、濁った瞳。

少女はそのそと動き、地面に四つ這はいになって立ち上がる。躊躇する。

しかし足が震えていて上手く力が入らないのか、ふらふらと数歩よろめいた後、顔からべちゃりと地面にキスをした。

「大丈夫？」

「あう……?」

フェイトは思わず駆け寄る。
見捨てては置けない。

やはり、母に相談するべきだろう。

しかし、フェイトの言葉を、母は聴いてくれるだろうか？

「みつどちるどらん、みつちりあ」

「えっ?」

フェイトが考え事をしていると、少女は何事かを呟き、思わず聞き返す。

突然、真っ白な少女を中心とした床に青い光の魔法陣が出現した。
三角形の頂点に円が配置されたものを2つ重ねたような、独特の魔法陣。

「、、」

歌うような旋律が謎の少女の口から漏れた。

「フェイトツ!」

不思議な音律に聴き入っていたフェイトは、アルフの声で我に返る。
謎の魔法が至近距離で発動しようとしているのを見て、止めるべきか一瞬迷ったが、距離を置いて見守る方を選んだ。
なぜそれを選択したのか、自分でもよくわからない。

「バルディツシュ、起きて」

“ yes , sir . ”

フェイトは万が一に備えて『魔法衣』バリアジャケットを装着する。黒いレオタードに白いミニスカート、黒いマント。

これは魔力で編まれた衣服で、軽装に見えるが全身を防御するバリアのような性質があった。

ミッドチルダ式（以下ミッド式）の魔法使い、『魔導師』は通常、この『魔法衣』バリアジャケットで身体を保護しながら戦う。攻撃魔法によるバックファイアを防ぐのと、防御魔法で受け損ねた場合の最終防衛ラインという、2つの意味がある。

フェイトはミッド式の魔導師であり、戦闘訓練も受けている。彼女を教えた師は既にこの世にはいないが、自分の身を守る方法を一通りは教えてくれていた。

「ヘブシマーン 翻訳開始」

意味は解らないが残念な気持ちになる。

その魔法はフェイトとアルフが見ている前で、たっぷり1分かけて完成した。

攻撃用の何かを展開するでもなく、防御を行なっている様子も無く、青い魔法陣も消える。

通常、ミッド式の魔法陣は2重円の内側に正方形を2つ重ねた形である。

しかし、謎の少女のものは2重の3角形。
ということは、この真つ白な少女の使う魔法はミッド式ではないと
いう事になるが。

「あ、あー、斜め七十七度の並びで泣く鳴くいなくナナハン七台
難なく並べて長眺め、うん」

喉の調子を確かめるように、何事かを呟いて頷く。

早口言葉か何かだろうか。

そんな風にも聞こえた。

「ごめんなさいさ。ミッド語は慣れてなくて、翻訳魔法を使ったさ」

腕で身体を隠しながらも、少女は警戒する2人に微笑んでみせる。

フェイトとアルフは顔を見合わせた。

特に念話も交わさず、アルフは準備していた旅行鞆を開く。

とりあえず、服を着せなければ。

「ここはミッドチルダさ？」

ピュアと名乗った真つ白な少女は、フェイトに聞いた。

「えっと……確か第97管理外世界の近くだから、違つと思つ」

「管理外……？」

「魔法が認知されていない世界ってことだよ」

フェイトが説明に窮すると、いいタイミングでアルフがフェイト用の衣服を上下ひと揃え持つてくる。

ピュアはアルフに手伝ってもらいながら、上の黒いシャツを着て、同じく黒いミニスカートを穿く。

体格的にフェイトと同じくらいらしく、ブカブカだったりきつかったりという事はなかった。

ただ、靴下はあっても靴の予備がなく、同じくフェイト用のスリッパを履く。

長期の滞在は予定していない。

ピュアは礼を言っ、そのまましばらく話をする事になった。何をするにも、お互いに現状を確認しなければならない。

「次元世界はわかる？」

「うん」

ピュアは頷く。

次元を隔てた場所にある、いわゆる異世界のことだ。

異世界や宇宙、異次元などという呼び方は状況によって意味が異なるため、次元の狭間に泡のように浮かぶ各世界のことを統一して『次元世界』と呼ぶ。

この呼び方はかなり古いもので、古代に魔法文明があった世界などでは、次元世界という言葉だけが残っていたりもする。

「じゃあ、もしかして時空管理局の方を知らないってことかい？」

「ジクウ管理局？」

『なるほどね』とアルフは頷き、大まかな概要を説明した。

『時空管理局』とは、簡単に言えば次元世界を跨ぐ警察機構だ。様々な世界から集まった人々が作った法律に基き、管理世界の間を取り持つ役目もある。

裁判所と警察が一緒になっている部分もあり、中々複雑なところもあるが、今はそこまで説明することも無いだろう。

管理世界や管理外世界というのは、要は管理局の存在を受け入れていたり、魔法を一般的なものとして認知している世界かどうかである。

管理世界は、ミッドチルダや管理局と交流がある世界。

管理外世界は、魔法が存在しない等の理由で技術的な交流が禁じられている世界。

分類としては他にも無人世界や無生物世界など色々とあるが、今はそこまで話を広げる必要も無いか。

「ここは『時の庭園』っていう、なんて言うのかな、次元航行ができる別荘みたいなものなんだ」

次元空間を移動中のため、滅多なことでは他の人間は入り込めない。それなのにピュアはここにいた。

「どうやってここに入り込んだのか、ある程度でいいから説明してほしいんだよ」

アルフは言う。

おそらくピュアは次元の穴に落ちて偶然『時の庭園』に流れ着いた

のだろうが、魔法を使えるということは意図してここに侵入した可能性もある。

それにしてもセキュリティは反応していなかったのだ。

次元の穴に落ちた人間であろうが、外から突然入り込めば防衛機構セキュリティが反応するはずなのに。

意図してやってきた場合、セキュリティを出し抜いた可能性が高く、対応も考えなければならなかった。

「辛いことまで話す必要は無いんだよ？」

フェイトは気遣わしげに声をかける。

今から法に触れるかもしれないことをやるうとしていたのだが、彼女生来の優しさが厳しい追及を許さないようだ。

子供ゆえの甘さ、とも言えるが。

「わたしの胸には、何かが埋め込まれているさ。

それがある限り、わたしは死んでも別の次元世界に転生するさ」

ピュアは俯き加減に話した。

「何かあって？」

「詳しいことは知らないさ。多分、人工的な魔力集積器官リンカーコアみたいなものだと思うさ」

魔力集積器官リンカーコアとは、魔導師が持つ、周囲のエネルギーを吸収して魔力に変換する臓器のようなものだ。

時空管理局の本拠地であるミッドチルダの最先端研究機関でも、それ以上の説明ができない、謎の器官である。

これは基本的に生来のものであり、魔導師としての資質に大きく関

わってくる。

ピュアの話によると、その何かを胸に埋め込んだことによって彼女の心臓はその機能を維持し続けているのだそうだ。そしてそれはピュアの心臓が止まりそうになると、高次元空間に肉体を転移させ、自動で肉体の修復を行なう。その修復が完了した時、また通常空間へと帰還する。そうやって何度も転生を繰り返してきたのだとか。

「それって……!」

「違法研究じゃないのかい?!」

「気にしないでさ」

「気にしないでって、ピュアはそれでいいの!?!」

なんでもないような口調のピュアに、アルフとフェイトが食ってかかる。

「わたしは今まで管理局を知らなかったさ。管理局が知ってるよりも、ずっと遠くから来てるぞ」

「あ……」

フェイトは気付いた。

ピュアをこんな風に改造した犯罪者は、ピュア自身にももつどこにいるかわからないのだ。

管理局のことをピュアが知らなかったということは、それだけ長い距離を隔てて転生してきたのである。

もはや探し出すことなどできない。

彼女は下手に騒いだり悩んだりするよりも、今ある現実を受け入れて強く生きようとしていた。

それにあえて異論を唱える資格は、今のフェイトやアルフには無い。
そう思ったから、黙るしかなかった。

第1話 転生、希白少女（後書き）

第一話。

ピュア嬢が『時の庭園』に転生したことによる影響について、しばらくは書いていきます。

真面目な文調の間にギャグを挿入して、暗く偏る雰囲気壊す努力はしています。

ペプシマンのCMは、最近は消えてるみたいですね。

数年TV見てなかったので、流行の変化についていくのが大変です。

第2話 少女達の事情

『殺しなさい』

『え、母さん?』

『二度は言わないわ』

一方的に念話が切られる。

ピュアについてフェイトが母プレシアに相談したところ、次元漂流者らしいと話したところでこの会話である。

「あの鬼ババア、なんてことを……!!」

念話を聞いていたアルフが憤慨する。

「あんなの言うこと聞く必要なんて無いよ!」

「落ち着いてアルフ」

フェイトも、内心違和感を持っていた。

母親の娘に対するような態度ではない。

それが違和感のまままで終わってしまうのが、社会を経験していない子供なのかもしれない。

同時に、はっきりと犯罪になることを指示したという事実にも、少なからずショックを受けている。

「オニババさんってフェイトちゃんのお母さん?」

「いや、オニババって名前じゃないって……」

フェイトに宿められたアルフがツッコミを入れる。

どうもこのピュアという少女、天然ボケの気があるようで、妙なところでズレていた。

3人は話し合う。

ピュアはこのまま殺されても、また別の世界に転生するだけだから構わないと言った。

当然だが、アルフとフェイトはそれを却下する。

とはいえ、アルフとフェイトにも何か良案があるのかというと、そうでもなかったのだが。

結局のところ、フェイトもアルフも実社会というものを知らないのである。

知識として管理局の法律などを一般常識程度に知ってはいたが、経験はほとんど無かった。

結局、これから向かう第97管理外世界『地球』へ一緒に行き、どこか現地住人に一時匿ってもらうことになった。

『ジュエルシード』の件が片付いた後、改めて時空管理局にSOSを発信しピュアを保護してもらう流れになる。

時空管理局が来るまで数日かかるだろうから、その間にフェイト達は『時の庭園』に引き籠もってしまえばいい。

それでピュアも納得し、一緒に地球へと降り立つことになった。

地球の文明レベルはそこそこ高い。
魔法の領域には達していないものの、一部では魔法技術でも作成が
難しいものの製造技術が確立していた。
その点からも、準管理世界に名を連ねる日も遠くないとされている。
とはいえ、それは結局一部での話だ。
まだまだ技術は普及していないし、半分程度の領域では未だに原始
時代さながらの生活が行なわれていた。

「へー、電子レンジって言うさ？」

「中で出るのはマイクロ波みたいだね。
遮蔽が甘くて外に漏れてるから、動いてる間はあんまり近付いちゃ
ダメだよ」

「うん」

アルフがフェイトとピュアに説明する。

覚えるのは面倒だったが、この辺の知識を教わっておいてよかった
とアルフは思った。

ついでに、この手の調理器具や対応した保存食品が開発されていて
良かった。

3人とも、まともな料理などできないからだ。

もっともそれは単なる知識不足によるものだったが。

上記の通り、しばらくは冷凍食品を解凍して並べるだけの食事にな
りそうだった。

フェイトとアルフが地球に来た理由である『ジュエルシード』探し
について、急がなければならなかったという理由もある。

それについてピュアは何を思ったか、協力を申し出た。

最初に、マンションの屋上でアルフが広域探索魔法を使った後のことだった。

1回目では探索魔法に引つ掛からなかったのだが、なぜかピユアが屋上に上ってきて、言ったのだ。

「広域探査だけでも協力したいさ」と。

「でも、これからアタシ達がやるうとしてるのは、犯罪スレスレのことなんだよ?」

「黙ってればバレないさ」

悪びれることなく、とんでもないことを言い出す。

確かにピユアはデバイスを持っていないため、履歴に記録されることはない。

フェイトとアルフが黙っていれば、時空管理局も調べようがないだろう。

フェイトにもアルフにもその考えを覆すことはできず、結局ピユアの主張は通ってしまった。

ただし、時空管理局が出てきたら手を引くこと、と条件はつけたが。

巨大な3角形を重ねた魔法陣が展開される。

「、」

朗々たる詠唱はまるで歌っているようにも聞こえた。
一歩二歩と、魔法陣の中をゆっくり、円を描くように歩く姿は、神に祈りを捧げる巫女のようにもあった。
ピュアが扱う魔法はミッド式にはない、神聖な雰囲気があるように思う。

何より、長い。

もう10分はこうして詠唱を続けている。

ミッド式の儀式魔法でも、ここまで長いものはそうそう無かった。少なくともフェイトは知らない。

もちろん、今フェイトが使えるような高速戦闘用の魔法でも、デバイスの補助があるからこそものの数秒で発動できるというだけで、デバイス無しではそれなりの時間がかかってしまうものもある。それにしたって、長いものでも精々5、6分といったところだが。

詠唱が完成する。

「エエイマムム 広域探査開始」

なぜか、不安な気持ちになる。

ミッド式のように、『サーチャー』と呼ばれる小型の視覚情報端末を飛ばすものではない。

特にピュアの周囲に何かが起きるといっわけでもない。

フェイトとアルフが揃って首を傾げると、目を閉じていたピュアが何か呟く。

「ええと……あ、発動したさ……!?!」

「え　！？」

フェイトとアルフは驚き、一瞬遅れて『ジュエルシールド』特有の魔力波を感知した。

「近くに別の……魔法使いの人が2人いるさ」

「うん、急がないと……！」

フェイトとアルフはすぐに反応があった場所に急行する。

ピュアは、フェイトとアルフを見送った後、フラフラとおぼつかない足取りで部屋に戻った。

嘔吐感に耐えながら、部屋につく頃には這っていたようにも思うが、よく覚えていない。

トイレで嘔吐し、昼に食べたものをほぼすべて吐き出した後、洗面所で口を洗う。

そうすると、幾らかすつきりする。

もう何度も死んだり転生したりを繰り返してきたが、この感覚にだけは慣れることができない。

探査、検索系魔法を使ったときに蘇る、他人の今際の絶望。

フェイトと、アルフの感情の動きを思い出す。

フェイトは素直でまっすぐで、優しい。

母親について何か大きな悩みがあるようで、それが『ジュエルシード』というものを探す理由にもなっている。

しかし、今は何か揺れていた。

それはピュアのことを母親に報告した念話の前後からだ。

アルフが強い警戒から突然激しい怒りに転じたことにも、酷い命令以外に何か理由があるのかもしれない。

だからまあ、ピュアもその場では強く聞けなかったのだが。

なぜピュアにこんなことがわかるのかというと、ピュアには『情動感応』という特殊能力レラスキルがあるからである。

それは思考をすべて覗き見るようなものではないが、接近した人間や動物がどのような感情を抱いているかがわかってしまうものだった。

昔、この能力のせいで酷い目に遭い、今もその後遺症が残っている。それが先に述べた、探査系魔法を使用したときに蘇る他人の絶望だ。それはともかく。

フェイトがピュアのことを母親に相談する時、アルフはフェイトの母親に強い警戒心を抱いていたのである。

アルフとフェイトの関係は性質から考えれば『使い魔契約』のそれだろう。

ということは、アルフがフェイトを心配するのは、純粹に使い魔が契約主を護る行動ということになる。

その相手は、本来心敵の安らぎとなるべき母親。

ということとは、何か母親の方に異常がある。
それをフェイトは認識し、なんでも願いを叶えるという『ジュエル
シード』に頼ることで、正常に戻そうとしている。
今、得られる情報から考えれば、こんなところか。

予想されるのは母親による虐待。

それもおそらく、暴力を伴ったもの。

実際に見たわけではないが、フェイトのシャツの下には見るも無残
なアザがいくつもあることだろう。

それに加えて、念話の所要時間が問題だ。

娘にかけるべきではない言葉を母親が吐いたのだとしても、短すぎ
る。

断言してしまうには情報がやや足りないが、フェイトが考えている
よりももっと、事態は悪い方向に向かっているのではないだろうか。

一度、フェイトの母親に直じかに会ってみる必要があると思った。

ピュアは目覚めた。

少し眠ってしまったていたらしい。

トイレで吐いて、口の中を洗面所で洗った後、リビングのところで
床に突っ伏していた。

まずい。

フェイトとアルフが戻ってくる。

少なくとも、ベッドに入っていなければ。

だるい身体を動かし、床を這って寝室に向かう。
ようやくベッドに潜り込んだところで、マンションのドアが開いた。
これならまだ、誤魔化しも利く。
体力的な問題と、誤魔化せる。

そう思つて安心すると、気が抜けたのか、意識が一気に闇の中へ落ちていった。

「『ジュエルシード』も早々に2つ確保できたし、幸先がいいねえ」
「うん。ピュアにお礼を言わないと……」

フェイトはアルフの言葉に頷いて呟く。

『ジュエルシード』が落ちていたのは、豪邸の敷地にある森の中だった。

どうやら発動したといつても暴走したわけではなかったようで、猫が1匹巨大化した程度であった。

先に来ていた魔導師の少女と戦うことになったが、どうやら魔法を覚えてから間もない素人だったらしく、結局フェイトが勝利を収め、『ジュエルシード』を1つ、入手していた。

ピュアの広域探査魔法は、『ジュエルシード』の反応はおろか、付近にいる魔導師のことまで捉えていた。

しかし、使い魔と魔導師の区別がつかないのか、現場にいたのは白い魔法衣の少女と1匹のフェレット。

それでも、急いでいなければ先に『ジュエルシールド』を確保されていた可能性はある。

そう考えると、ピユアが使った広域探査魔法はかなり精度が高いのかもしれない。

マンションに戻るとピユアはベッドで眠っていた。

あれだけ高性能な広域探査を行なったのだ、かなり疲労が溜まっていたのだろう。

ミッド式のものでさえ、身体にかかる負担は大きいのだ。

フェイトはそう考えると自然と微笑みが零れた。

あどけない寝顔。

構わず一緒にベッドに潜り込み、自分より幾らか華奢な身体を抱き寄せて呟く。

「おつかれさま」

第2話 少女達の事情（後書き）

第二話でした。

リメイク前では『隠蔽された苦痛』の部分ですね。

リメイク前の感想に、二次創作なんだから原作部分も入れてほしいって要望があったのですが。

やってみるとやつつけ感満載の見苦しい文章になったので、見苦しい部分を削除して、代わりに前後の描写を入れました。

『ええいままよ』のネタは作者的には『ブラックジャック』から持ってきました。

ブラックジャックが「ええいままよ」とか「南無三」とか言って助かった人って、ほとんどいません。

それくらい無茶な状況だったんでしょう。

広域探査魔法でこんなことを口走る人はあんまり信用したくないですよね。ね？

第3話 寝言

ピュアの広域探査魔法の精度は、ミッド式のそれを遙かに凌いでいた。

探査距離、誤差、精度、そして、肉体にかかる負担までも。

最初に『ジュエルシード』を入手してから6日が過ぎた。

1つは近くの湖の畔。ほとり

1つは海の中。

1つは少し離れた森の中。

1つは温泉宿の近くの川の中。

このとき、フェイトは白い魔法衣バリアジャケットの少女と鉢合わせした。

もっとも、ピュアに伝えられていたため、驚きはしなかったのだが。それから『ジュエルシード』を賭けての魔法戦を行い、これに勝利もつ1つ。

1日に一度、ピュアの体調を見ながらで休ませた日もあったとはいえ、それに見合う、いや、それ以上と言える成果が出ていた。

ともかく、これで6つ『ジュエルシード』を確保できた。

ただ、なのは、という白い魔法衣の少女の言葉に、フェイトは心が揺れるのを自覚していた。

自分達がやっていることは、犯罪スレスレの行為だと自覚しているがゆえに。

ただまっすぐに、純粹に、歳相応の子供らしく、そのひと言ひと言がフェイトの心に入り込むのだ。

事情を話して、協力してくれるというのなら、こつやって奪い合つ
のではなく、共闘できたなら。

しかしそれは、母は受け入れない。
聞いてしまった。

はつきりと、『侵入者を殺せ』と。
ならば、共闘したことが知られば、必ず裏切り奪い取れと命じら
れるに違いない。
それはできない。

このまま、ピュアは厚意の協力者、なのはは敵対する魔導師。
それでいい。
それでいいはずなのに。

『あなたとお話したいの！』

まっすぐな瞳で、純粹な気持ちを、歳相応の子供らしい言葉に載せ
て、送ってくる。

心の防壁を越えて、浸透してくる。

応えたい。

心がざわめく。

「フェイトちゃん、大丈夫？」

目覚める。

そこにあつたのは、心配そうに覗き込むピュアの色彩のない真っ白な顔。
詳しくは聞いていないが、瞳は濁っているものの、魔法か何かで視覚を代用しているようだ。

思わず、寝間着に包まれたその華奢な体軀を抱き寄せる。

「ひゃっ!?!」

ピュアは少し抵抗の意思を見せるが、力を込めるとすぐに大人しくなった。

「いつ、たい……!」

さらに力を込める。

温かくて柔らかい。

荒んだ心が癒されていくようだ。

「その、ごめんなさい……」

フェイトは平伏する。

あんまりに心地良いので、寝惚けていたこともあり、そのまま思い切り抱き締めてしまったのだ。
しばらくもぞもぞと蠢いていたピュアが、ぐったりと動かなくなつたのである。

数分後、朝食に起こしに来たアルフが気付いたので事なきを得たが、

ピュアはしばらく怯えていた。

まさか子供の細腕で死に掛けるとは思わなかった。一度、アルフとは念話でピュアの戦闘力について話したことがあったが、どうやら無駄だったようだ。

寝惚けたフェイトに抵抗できない程度の体力となると、どんな戦闘技術があつたとしてもほぼ台無しである。

下手をすると幼稚園児より弱いのではなからうか。

朝のこともあり、ピュアの体調が思わしくないので、フェイトとアルフが『ジュエルシールド』探しに出かける。

最近ピュアのサポートもあり、フェイトの体調も決して悪くはなかった。

ということ、多少の無茶も利く。

広域探索魔法で大雑把な位置を掴み、広域への魔力放射で『ジュエルシールド』を強制発動させるのだ。

この方法は、広域探索だけでは位置を特定できそうにない場合に使うおもう思っていた。

ピュアが次々と『ジュエルシールド』を発見したため機会がなかったのだが、フェイトの体力に余裕もある今なら使うべきだろう。

魔力放射とは、様々な使われ方をする。

原理で言えば、『リンカーコア』で周囲の魔力素から変換された使用に適した魔力を散布し、射砲撃の威力減衰を防いだり、魔力を術式に結合させる補助とするのが一般的だ。

今回は、『ジュエルシールド』に射撃魔法を直撃させた状態を擬似的に再現し、半ば暴走に近い形で発動させる。

『ジュエルシード』は、発動さえしていれば発見も封印も容易だ。当然、魔力の放出は肉体に負荷をかけるため、広域への放射はまだ未熟なフェイトの身体には大きな負担となる。

アルフが封時結界を展開し、フェイトが魔力放射を行なう。

封時結界とは、術者が設定した条件に合う者を現実世界と重なった現実世界には影響の出ない位相の違う亜空間を展開する魔法だ。術者の定めた条件と言っても、『リンカーコア』の有無など、大雑把な括りでしか選べないのは難点かもしれない。とにかく、この魔法を使用すると、現実世界から亜空間へ、条件に合ったものつまり今回の場合は『魔力を持ったもの』が送り込まれる。

『リンカーコア』を持つ者にならそれは視覚として見えるので、近くにいればすぐに気付くことができるのだが。フェイトは半ば、なのはと名乗った白い魔法衣の少女が来ることを望んでいた。

「気付かれたみたいだよ」

「うん。『ジュエルシード』は見つけた。行くよ、アルフ」

「ああ！」

ビルが面する大通りの隅に、『ジュエルシード』は落ちていた。

「『ジュエルシード、？10、封印』」

“sealing”

金色と桃色の光が二重に『ジュエルシード』を封印する。

黒い魔法衣バリアジャケットのフェイトと、白い魔法衣バリアジャケットのなのはが対峙した。

これで3度目の戦い。

なのはの構えや拳動から、相当な訓練を積んできたことが窺うかがい知れた。

物凄い勢いで成長している。

今度は、油断できない。

ソファで休んでいたピュアは、はっきりとその声を聞いた。

『自分の暮らしている街や、自分の周りの人たちに危険が降りかかるのは嫌だから。これが、私の理由!!』

子供らしいといえれば子供らしい、清々しいまでに理屈をかなぐり捨てた感情の発露。

これは口に出して叫んでいるな、とピュアは思う。

文脈的にもそうだし、状況的にも話に聞いていた白い魔法衣バリアジャケットの少女らしい叫びだ。

そこに浅い怒りはあるが、憎しみや恨み、不安といった負の感情はない。

勝敗すらも、今の彼女は置き去りにしていた。

ピュアが持つ『情動感応』は、外に向いた強い感情なら、離れていても心の声まで聞こえることがある。

不意に。

フェイトの心が大きく揺れた。

それを感じ取ったアルフが何事かを叫び、ある程度安定させる。

強い感情だから離れていても感じ取れたが、何を言ったのかまではピュアには聞こえなかった。

しかし、フェイトの精神は以前よりもさらに不安定だ。

今にも泣き出しそうで、それでも自分の目的のために、立ち止まることを許さない。

立ち止まる自分を赦さない。

「フェイトちゃん……」

最早、一刻の猶予もない。

このまま放置すればフェイトの心は壊れてしまう。

念話で、どうやって呼び戻す？

『『ジュエルシード』を諦める』などと言って、彼女が受け入れるだろうか。

ピュアがソファから身を起こして思索していると、大きな魔力の爆発のようなものを感じ取った。

この現象はよく覚えている。

『ジュエルシード』の暴走だ。

しかも、今までの暴走よりも放射されているエネルギーが遥かに大きい。

空間が裂け始めるレベルだ。

このまま暴走し続ければ、いずれこの世界を飲み込んでしまう。

ピュアは慌てるが、どうしようもない。

彼女は飛行魔法が使えないのだ。

今から徒歩で向かって、間に合うとは到底思えなかった。
アルフかフェイトに念話で迎えに来てもらっしかない。

ピュアは『情動感応』というレアスキルを持っている関係上、自分の感情操作には慣れてしている。

だから、ピュアなら『ジュエルシールド』に願って、事象をある程度コントロールすることはできそうだった。

しかし念話を送る時になって、フェイトの強い感情がそれを遮った。

『鎮まれ……鎮まれ……！』

先程まで壊れそうに不安定だったとは思えない、強く願う感情。

余計な雑念が除外、最適化されていき、ただ一筋に向かう。

その中心にあったのは、白い魔法衣バリアジャケットの少女への義務感だった。

何事もなく終わったかもしれない、白い魔法衣バリアジャケットの少女の『ジュエルシールド』探し。

自分の周囲の平和を守ろうとする行為を邪魔しているのは、間違いなく自分達なのだから。

自分達の勝手な都合で、『ジュエルシールド』を横取りしようとしている。

ならばせめてもの義務として、この世界を、あの少女が守ろうとしているものを傷つけてはならない。

果たして。

『ジュエルシールド』の暴走は止まった。

同時に、フェイトの意識が途切れる。

10分後。

「 、 ” 」

アルフはピユアに疑念を持った。

この真つ白な容姿の少女は、意識を失ったフェイトを抱えたアルフが帰ってきた時には、既に詠唱を始めていたのだ。念話で連絡したわけでもないのに。

それからもたつぷり5分かけて、スベルキャスト呪文詠唱は終わる。

「 キレテナイ “ 回復結界展開 ” 」

この残念な気持ちになる詠唱は一体、何なのだろうか。青い魔法陣と共に直径2mほどの小さな結界が展開される。

威力は凄まじいと言だった。

広域魔力放射、戦闘、『ジュエルシード』の捨て身の抑え込みという、蓄積した疲労からすれば半日眠っていてもおかしくなかったフェイトが、3分ほどで目を覚ましたのだ。

慌てて確認すると、『ジュエルシード』を素手で抑え込んだときの傷が塞がりかけていた。

「 『リンカーコア』に魔力を満たして、肉体の自然治癒力を活性化させたさ」

ピユアの故郷の魔法には、こんな、間接的な治癒魔法しかないのだという。

その関係上、どうしても外科手術的なミッド式には劣る部分がある。それにしたところで、ここまでの効果を發揮できる治癒魔法を使える者がどれだけいるだろうか。

不思議なのは、これだけの魔法を使ったにもかかわらず、ピュアの体調がそれほど悪化したようには見えないことだ。

広域探查魔法と一体何が違うのだろうか。

翌日、フェイトはベッドで目を覚ます。

少し寝過ぎていてる気がした。

それもそのはず、1日でかなり無茶をした彼女は、大事を取ってその日は無理矢理ベッドに寝かしつけられたのだ。

ピュアの魔法のおかげで怪我もほとんど治り、体調もかなり回復していたのだが。

しかし、それを確認したピュアが、ベッドから出ることを許さなかった。

『この魔法は体の疲労を取るさ。でも、心の傷を癒すことはできないさ』

そのひと言に、何も言い返せなくなった。

体調は良くて、なのはの言葉に色々と考えてしまって、自分がすべきことを見失いかけていたのは事実だ。

気持ちを整理する時間は必要だったかもしれない。

「ん、ふぁ……」

伸びをして横を向くと、色彩のない真っ白な少女のあどけない寝顔があった。

朝、と言つには少し早い時間に目覚めてしまったようだ。

「んう……おか……さ……」

ピュアは夢を見ているらしい。

母親が恋しいのだろう。

この辺りはまだまだ子供だ。

フェイトは寝間着姿のピュアを優しく抱き締めた。

当然、白い唇が無意識に紡ぎ出す言葉を、間近で聴いてしまう。

ピュアが無意識に維持している翻訳魔法が、

無情にも、

その言葉を、

正確に、

フェイトに、

伝えた。

「おかあさん……おねがい……わたしを……ころして」

第3話 寝言（後書き）

第三話でした。

原作で次元震が発生する回です。

ピュアはある事情から、転生してすぐは幼稚園児に負ける程度の腕力しかありません。

ある意味超人なフェイトが寝惚けて思い切り抱きしめると、体がミシミシ言い出します。

なんて羨ま……ゲフンゲフン

キレテナーイの元ネタは、皆さんご存知、ヒゲソリのCMです。

あれも最近見なくなっただんですが、消えてしまったんでしょうか？

第4話 たすけたい

それが夢だと気付いたのは、鏡を見たときだった。

滲み、揺らぎ、ぼやけた視界の中、辛うじて自分の動きだとわかるもの、つまり姿見の大きな鏡を見つけた。

その中の自分の姿に違和感を覚える。

とはいえ、視界が不鮮明な状態では、大雑把なところしかわからない。

それでも、近付けば髪の毛が白か黒か、という程度のことは識別できる。

幸せだった頃の夢。

魔法による擬似視力が上手く調整できなかった頃ということは、おそらく改造手術を受けて間もない時期だ。

最初は口頭で、母から様々な故郷の逸話など、御伽噺にも近い話を教わった。

故郷の魔法の使い方を教わったのもその時期だ。

ずっと母に甘えていたように思う。

しかし、その母はもういない。

生きているのか、死んでいるのか、最早時間の感覚もなくなっている。

あれからどのくらいの時間が過ぎたのかも、自分にはわからなくなっていた。

そして、自分には、逢う資格も無い。

言うてはいけないことを言うてしまったから。
自分で幸せな時間を放棄してしまったから。
苦しみに耐えかねて。
母に酷いことを懇願してしまったから。

「お母さん、お願い、わたしを、殺して」
と。

朝。

結局、フェイトは何も言わなかった。
おそらく、ピユアも触れてほしくないだろうと、そう思ったから。

「今日は経過報告でね、一度『時の庭園』に戻るんだよ」

朝食後、アルフが話す。

そういえばそんな話だったなとフェイトは思い出した。
もう地球に降りてから2週間が経つ。
そろそろ一度母に会って、協力してくれているピユアのことも含めた現在の状況を話さなければならぬ。

「わたしも、フェイトちゃんのお母さんに話したいことがあるさ」

「え？」

真っ白な少女ピュアの言葉に、フェイトは戸惑う。

今の母が本来部外者であるピュアの言葉になど、耳を貸すだろうか？
問答無用で殺されてもおかしくない。

「わたしは、『アルハザード』に行ったことがあるさ」

顔は笑っていたように思う。

しかし、目は決して笑っていなかった。

声も少し震えていたように思う。

隠そうとして、隠し切れない、複雑な感情。

「だから、ある程度『アルハザード』の技術も知ってるさ」

「でも、問答無用で殺されるかもしれないんだよ……？」

「大丈夫、わたしは死なないさ」

それ以上はフェイトもアルフも強くは言えず、結局ピュアは意見を押し通してしまう。

なぜそんなことを言い出したのか、ついに聞きだすことはできなかつたが。

「そんなもの嘘に決まっているでしょっ？」

フェイトの母、長い黒髪の女性プレシアは断じる。

はっきり言ってしまえば、本当か嘘かなどどうでもよかった。ピュアという少女が、会いたいと。

それだけの理由で貴重な自分の時間を奪うのが、許せなかっただけだ。

だから、これからこの人形にお仕置きをしようと思う。

ごく自然な流れだ。今のプレシアにとっては。

だから、深くも考えずピュアという少女の言葉を嘘と決めてかかった。

そのとき、声が割り込む。

「なら、殺してみればいいさ。わたしが言ったとおりに死体が消えれば、わたしの言葉は証明できるさ」

「ピュア!？」

フェイトが悲鳴のような声を上げる。

部屋に外で待っているはずなのに、ピュアは勝手に入ってきたのである。

アルフはピュアの後ろに控えていた。

彼女は、ピュアにフェイトの現状を打開するための光明を見出し、自ら扉を開いたのである。

このままでは何も状況が変わらないと知り、せめてフェイトが暴力を振るわれる前に、と。

「覚悟はできているようね」

死刑宣告をするプレシアに、ピュアは堂々とはっきり言った。

「覚悟も何も、わたしはもう、助からないさ」

「何が目的？」

「終わった物語の主人公から、まだ続いている物語の主人公への、ただの伝言さ」

ピュアはアルフに言ってフェイトを下がらせる。

フェイトは不安そうにしていたが、『大丈夫さ』と断言して押し切った。

「先に言っておくけれど、法に外れているからという意見は聞かないわよ」

「わたしの話をするだけさ」

宣言通り、ピュアは自分の『アルハザード』における体験を話す。

まず、ピュアは一度死んでいる。

彼女の母親はそんな娘を蘇らせるべく、『アルハザード』を求め、辿り着いた。

そこで見事娘は蘇るのだが、約半年後、娘はその願いを受けた母親に殺された。

「……意味が解らないわ。どうして蘇った娘を殺す必要があるの？」
「それが『絶望の都アルハザード』の嫌らしいところさ」

今、こうやってまともに話ができるのは、奇跡以外の何ものでもない。

ピュアがフェイトとアルフに聞かれるのを避けた理由の1つがここにあった。

ピュアに『リンカーコア』のような性質を持った魔法具を埋め込んだのは、ピュアの母親なのである。

それによってピュアは、『エモーションナル・レゾナンス情動感応』というレアスキルに目覚めた。

これが1つ目にして最大の奇跡である。

このとき目覚めた能力が単純な『電撃』だったなら、自分が発した電流でピュアの肉体は焼き尽くされ、一瞬の内にミネラルの柱となっていただろう。

あるいは『瞬間移動』だったなら、細胞一つ一つをバラバラに移動させてしまい、細切れになっていたかもしれない。

とはいえ、それでも『情動感応』は最初、容赦なくピュアに牙を剥いた。

近くに『アルハザード』技術の犠牲になり、絶望の内に死に行くだけの人々がいたために、その感情をダイレクトに受け取ってしまったのだ。

無理矢理『情動感応』に目覚めさせられたようなもので、それを制御したり、流れ込んでくる感情を受け止めるだけの精神力を、ピュア自身は持ち合わせていなかったのである。

当然、ただでは済まない。

負の感情に押し潰され、日に日に弱っていく娘を見かねて、母親はもう1つ『アルハザード』製の技術に手を出した。

強力な封印に使用できる魔法具を、娘の身体に埋め込んだのだ。

2つ目の奇跡は、それが何もしなければ無害な類の魔法具だったことである。

封印維持によって強い負担が発生するタイプだった場合、死までの時間が20秒ほどという魔法具があるのだ。
もちろん、丁寧に使い方を解説したデータベースなど存在しない。

この2つの奇跡を乗り越えて、半年は幸せに暮らした。

ただこれも、2人に『アルハザード』を出る理由がなかったためだ。

当然、『アルハザード』には力を求めてやってくる者もあり、そういった人間は脱出する手段を探す。

『アルハザード』にいる限りそういった人間の目を逃れることは不可能であった。

なぜならば、5ほどの摩^{ビル}天楼と無人の民家のような家が10ほどある以外は、一面砂漠だったからである。

ピュアと母親はそういった人間に捕まり、脱出する手段の搜索を手伝わされた。

だが、ついに脱出法は見つからなかった。

ただし、『アルハザード』に居ながら、標的を暗殺する手段なら存在した。

それが、ピュアの『情動感応』を封じるために埋め込まれた、『アルハザード』製の魔法具だったのである。

それはピュアの『情動感応』と組み合わせることで、ピンポイントの遠隔爆撃を可能とするものとなった。

つまり、標的^{ターゲット}の死の瞬間まで、ピュアの『情動感応』は標的^{ターゲット}と繋がっているのだ。

死の絶望や苦痛は容赦なくピュアの精神を刻んだ。

それを思い出そうとすると、今でも体調を崩すほどに苦しんだ。

ピュア自身、それ以降のことはよく覚えていないが、1ヶ月以上は

ベッドに縛り付けられていたようだ。

なんとかかまとも意識が戻った頃には、
身体はガリガリに痩せ細り。

寝汗で寝間着やベッドはぐトぐト。

髪の毛は白を通り越してほぼすべて抜け落ちていた。

そして。

看病に疲れてやつれた母を見て、ピュアは。
懇願した。

『お母さん、お願い、わたしを、殺して』

と。

「もし、プレシアさんがそんなお願いされたら。
ちゃんと生き返らないように。
転生しないように。」

殺してあげてほしいさ

「！」

プレシアは口を開き、そして閉じる。
喉まで出かかった言葉を飲み込む。

『できるわけがないじゃない。プレシア娘を殺すなんて』

ピュアの母親もそうだったに違いない。

そしてそんな自分を想像できなかったから、この悲劇は生まれたの

だ。

ありえない容姿を持つ少女。
すべての色彩を失った少女。

本来の髪の色、瞳の色、肌の色は何色だったのだろう。

想像しかけて、その姿が娘と重なった。
アリシア

「っ　　！！」

ぞわり、と背筋に悪寒が走る。

一歩二歩と、後ろに下がる。

認めたくない、あつてほしくない想像が脳裏を過ぎった。

ピュアの言葉を思い出す。

今のピュアでさえ、幾つかの大きな奇跡の産物なのだ。

目の前で爆発四散するかもしれない。

苦しんだ拳句に発狂して死ぬかもしれない。

もっと悪くすれば、プレシアが自分の手で殺すことになるかもしれない。

いや　　。

そう、例えば。

永遠に苦しみ続ける　　。

殺せなくなる　　。

かもしれない。

ピュアのように。

ぐらりと。

視界が
傾^{かし}いだ。

「ピユア、大丈夫かな……」

金髪の少女フェイトは、オレンジ色の長い髪の女性アルフの胸に頭を埋めながら呟く。

しばらく前にピユアと暮らし始めてから、フェイトは不安なとき、こつやつて誰かに抱きつくようになった。

マンションを借りているとはいえそれは1人用の部屋で、アルフはリビングのソファで寝るつもりだった。

そこにピユアが転がり込んできたようなものである。

事情を聞きフェイトが1人寝かせるわけにはいかないと、言い出した。

それからピユアとフェイトは、1つしかない大きめのベッドで一緒に寝るようになったのだ。

初日はフェイトが寝惚けてピユアを絞め殺しかけたりしたアクシデントもあったが、よほど心地良かったらしい。

不安があるとアルフかピユアに抱きつくようになったのは、それからである。

「じゅめんよ、フェイト」

アルフは謝る。

今回ばかりはフェイトの気持ちもよくわかった。

今、戦闘力が皆無なその少女は、フェイトの母親プレシアと対峙している。

何かあれば念話で伝えるように言っているが、アルフが最も危険視している人物と密室で2人きりなのだ。

逆鱗に触れればいきなり殺されてもおかしくない。

アルフがフェイトを連れて部屋を出たのは、ピュアの名状し難い迫りに気圧されたことだった。

あるいは虐待を受けているフェイトを救ってくれるのではないかと、思ってしまったのである。

今からでも部屋に戻り、2人の話に立ち会うべきかもしれない。

しかし、部屋に入る前、ピュアが言ったところによると、プレシアの意識がフェイトに向いていては、まともな話し合いにならないぞうだ。

そうかもしれないと思う。

使い魔であるアルフには狼だった頃の記憶が少し残っている。

それによれば、やはりプレシアのフェイトに対する接し方は、常軌を逸していた。

無理矢理に難癖をつけ、虐待に持ち込んでいる節すら感じられたのだ。

止めに入るアルフが近くにいれば、それすらも理由に振るう暴力を酷くした。

しばらく、アルフとフェイトは互いの不安を打ち消すように、座ったままじつと抱き合っていた。

『アルフさん、フェイトちゃん、プレシアさんが……!』

切迫した感情の乗った念話が届いた瞬間、2人はどちらからともなく身体を放し、部屋の扉を開けて中に踏み込んだ。

「ピュア……!?!」

「無事かい　え!?!」

戦闘の心構えを持って立ち入った2人は、その光景に意表を衝かれた。

“、”

真っ白な短い髪の毛、白い肌、白く濁った瞳の少女ピュアは、魔法陣を展開して呪文詠唱を行なっている。

その傍に居るのは、黒いウェーブのかかった長い髪の女性プレシア。

プレシアは地面に倒れ伏していた。

激しく咳き込み、大量の血を吐いている。

一刻を争う状況なのだど理解した。

「母さん!?!」

「……くっ!?!」

母親の下に駆け出してしまったフェイトに、アルフは背を向けて部屋を出て、治療装置を探しに走る。

確か、近くの部屋にプレシア特製の医療用装置があったはずだ。わけが解らないが、フェイトのためには、とにかく助けなければ。

プレシアは一命を取り留めた。

ピユアが無理をして強力な回復魔法を使い続けた御蔭である。

『時の庭園』の検査装置とデータベースで調べた結果、ある一つの病名が浮かび上がった。

『集積器官変異症』。

リンカーコア魔力集積器官に発生する腫瘍、『癌』である。

魔法の使用そのものには影響が出ないため、自覚症状がほとんど出ない難病だった。

症状はじわじわと増していく肉体への負荷。

それによって免疫力が低下し、他の様々な病気にかかりやすくなる。

今回の吐血はこの免疫低下によって併発した別の病気『日和見症候群』が原因であった。

『日和見症候群』とは、免疫力の低下によって普通は感染しないウイルスに感染したりする病気の総称である。

併発した病気はピュアの回復魔法と、プレシア特製らしき治癒装置の御蔭で快復しているが、『リンカーコア』の変異はその治癒装置では治せないようだ。

ピュアの強力な回復魔法でも、魔力集積器官リンカーコアそのものの変質まではどうにもならない。

ただし、ピュアの回復魔法は体力を回復させるため、それに伴い免疫力が回復しつつあり、すぐにどうこうという状況ではなくなっている。

根本的に治療する方法は、一応存在するようだ。

ただそれには、『リンカーコア』の魔力を直接操作することが可能な、専用の特殊な装置が必要となる。

だが、滅多に発症しない病気であるため、ミッドチルダに試作品が1基しか存在していない。

『ジュエルシード』探しは、しばらく中止になった。

それどころではなくなくなってしまったのだから、当然だろう。

フエイトは母の寝室に入り浸り、眠り続ける母の手をずっと握っていた。

また、ピュアも丸1日眠り続けた。

病気の応急処置のために、かなり無理をしたのである。

目覚めたピュアに食事を勧めながら、アルフは聞いた。

「一体、何があったんだい？」

プレシアは病気のことなど、アルフやフェイトには一切悟らせなかった。

それだけの精神力と執念を持っていたのだろう。

それがここへ来て、一気に悪化したように見えたのだ。

容態急変の原因はおそらく、精神的なもの。

ピユアがプレシアに話した内容に、自分の考えを覆す何かがあったに違いない。

アルフはそう思った。

例えば、プレシアが『ジユエルシード』集めを命じた、アルフも知らないような目的を諦めさせた、とか。

気を張って、病身を押しやり遂げようとしていたのだ。

妄執とも言えるその心を、ピユアの話が砕いてしまったような、そんな気がする。

「わたしの、身の上話をしただけさ」

「そうかい」

アルフは追求しなかった。

誤魔化しなのはわかっていたが、真実を知る必要があるとも思わな
いし、特別知りたいとも思わない。

最初から、言葉を濁すようなら話は打ち切るつもりだった。

第4話 たすけたい（後書き）

第四話でした。

原作ではプレシアによるフェイト虐待シーンが入るところです。

この話ではアルフがピユアを生贄にフェイトを救い出していますが、勘弁してあげてください。

ピユア自身もそれを望んでいましたし、アルフは主であるフェイトが最優先なので。

ピユアがプレシアに口を出した理由はまた別にありますが、この第四話ではあえて説明していません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1341ba/>

幻想郷の白き魔女【リメイク】

2012年1月6日17時51分発行